

**高等学校等における
オンライン国際交流の事例**
～日本在住留学生との国際交流の事例



文部科学省

MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN

他機関との連携による取組み【北海学園札幌高等学校】

グローバルコース2年生・3年生合同で毎年夏に行っている北海道大学の留学生とのグローバルサマーキャンプ（4日間）が中止となり、また2年生のカナダ研修も中止になったことから、グローバル教育活動としてOnline English Programを実施（3年生－11月21日、2年生－1月30日）。北海道大学の留学生との英語によるオンライン交流を通して、英語力の強化と共に留学生の国について知識を深め、さらに4月から取り組んでいるSDGs研究について質問し、留学生の国の現状を学んだ。

【プログラムの内容】

- ・ 本校生徒2名に対し留学生1名による30分間の交流 × 3交流（3名の留学生と交流）
- ・ 交流内容 ①留学生の国や文化について ②SDGs研究テーマについて ③留学生から見た札幌や北海道について ④留学生からの質問

【工夫した点】

- ・ 様々な国について学ぶ機会となるよう、応募者の中から幅広く留学生を選考。
（ナイジェリア・ベナン・マケドニア・マレーシア・ヨルダン・ポーランド・フィジー・ジャマイカ・ロシア・タイ・台湾・インドネシア・バングラデシュ・ジンバブエ・ナミビア・アメリカ）
- ・ 積極的な参加が可能となるように、本校生徒2名に対し留学生1名となるように留学生を選考。
- ・ 交流する留学生の国（3カ国）について事前学習。交流の際は、調べたことを説明した上で、興味や疑問を持った点に関して質問。

【今後の課題】

- ・ 北海道大学と実施可能な方法について協議を行いながら年度内に実施が実現できた。実際に行ってみての教育的効果から、単発のものではなく、定期的に実施ができないかを検討していく。



【経緯】

2016(平成28)年7月	この年に開設されたグローバルコース1期生に対し、北海道大学の留学生を招いての4日間のグローバルサマーキャンプを実施。
2016(平成28)年11月	グローバルコース2年生の海外研修としてカナダブロック大学への3週間の研修をスタート。
2020(令和2)年6月 同年8月	対面形式のサマーキャンプは実施不可能と決定。 カナダブロック大学研修の中止決定。北海道大学と実施可能な方法を協議開始。
同年11月 同年1月	グローバルコース3年生と北海道大学留学生とのOnline English Programを実施。 グローバルコース2年生と北海道大学留学生とのOnline English Programを実施。

他機関との連携による取組み【宮城県柴田高等学校】

仙台ランゲージスクールで日本語を学ぶ学生と柴田高校をオンラインで結び、各国の文化紹介や質疑応答により行った交流授業

【プログラムの内容】

- ・仙台ランゲージスクール上級クラスに所属する生徒（ベトナム、タイ、インドネシア、ナイジェリアの20代の方）と本校教室をオンラインで結び、Zoomを使用して互いに自己紹介並びに質疑応答を行う。
- ・仙台ランゲージスクールの生徒は同校教室から、本校生徒は2クラス同時展開で2コマ実施する。



【工夫した点】

- ・事前指導・・・全員に自己紹介と質問を英語日本語両方で準備させて当日の交流会への意識を高める。全員の中から代表者を募り積極的に参加させる。各国の国旗と言語を掲載したポスターに一人一言書かせる。当日各国語の簡単な挨拶を教室掲示し交流会への意欲を高める。
- ・交流会当日・・・ワークシートに記入することよりも「聞く、話す、感じる」ことに集中させる。
- ・事後指導・・・外国や自国に対する関心の高まり、英語学習への意欲の高まり、外国（日本）で努力している外国人の存在への気づきを自身で振り返り、多様な国の人々と意思疎通ができる素晴らしさを感じたり、地球市民として世界規模の問題を考えたりする一助とする。



【今後の課題】

多くの国の方と1コマで交流するには時間が足りず簡単な交流で終わってしまうため、計画的・継続的な交流ができれば、互いに一つのテーマでディスカッションするなどの目標設定も可能である。全員が英語のネイティブスピーカーではないため、意思疎通が日本語に頼りがちになる。

【経緯】

R2.12	本校勤務の非常勤講師が仙台ランゲージスクールにて教鞭をとっていることから、両校生徒にとって異文化理解や愛国心の醸成、さらにコロナ禍におけるリモート教育の実践に寄与すると考え、計画した。
R3.1	交流授業実施



高大連携による取組み Cross Cultural Talk 2020 【埼玉県立浦和第一女子高等学校】

東京外国語大学と本校の高大連携事業としておこなってきた東京外国語大学留学生と本校生徒による交流事業である Cross Cultural Talkが実施できないためその代替として、留学生と本校生徒によるオンラインでの交流事業を実施した。6カ国6人の留学生と本校生徒22名が参加して、6グループに分かれてSDG sに関わるグローバル・イシューについて英語によるディスカッションをおこなった。最終的にディスカッションの内容をポスター化し英語によるプレゼンをおこない情報の共有をおこなうことができた。

【内容】

＜留学生の出身国＞・イラク ・エクアドル ・ザンビア ・カザフスタン

・シンガポール ・ロシア （地域・民族・宗教・性別を考慮した）

今年度はCOVID-19の影響もあり、留学生の来日も限られている中、外語大のご協力により多数の留学生の参加が得られた。当日はエクアドルからの参加もあり、オンラインの特色である、瞬時に海外とつながることを実感できた。

【工夫した点】

- ・各班、事前学習で質問の内容を用意した。
- ・ジェンダー、貧困、経済、教育などSDG sに関わるテーマについて理解を深められるようにした。
- ・各班で議論した内容から課題をみつけ、その解決案までを相談し、ポスターにまとめて全体会で英語によるプレゼンテーションをおこなった。

【今後への課題】

- ・オンラインによる初めての試みだったが、通信状態など課題はあったが、実際に対面でおこなう場合と同じくらいの成果が得られた。
- ・生徒のプレゼン能力の向上が実感できたが、質問力の養成が課題である。

【経緯】

2015年度	筑波大学との連携によりプログラム開始 留学生10名 本校64名参加
2017年度	東京外国語大学と連携 留学生12名 本校64名参加
2019年度	留学生20名 本校123名参加
2020年度	留学生6名 本校22名 オンライン実施（第6回）



国内大学に在籍する留学生との連携による取組み【千葉県立佐倉高等学校】

SGHにおける研究開発の一環として実施してきた5カ国（オーストラリア・シンガポール・オランダ・ドイツ・イギリス）への海外派遣は新型コロナウイルス感染症の影響により全て中止となった。代替として東京大学留学生3名（カナダ・マレーシア・中国）に向けてオンライン（Google Meet）で課題研究発表を行い、指導・助言を受けた。本校では、その他にもドイツ、イギリスの交流校とのビデオ交流や香港高校生とのスカイプ交流など、コロナ禍を機にICTを最大限に利活用し、様々な取組みにチャレンジしている。

【プログラムの内容】

本校では普通科全生徒を対象にSGH事業を進めている。各学年には70班の研究班があり、その中からグローバルな社会問題の解決について研究する2年生8チームを選抜し、留学生に向けて英語による課題研究発表を行った。出身国の異なる3カ国の留学生から、それぞれの国の目線で意見をもらった。

【工夫した点】

発表時間が限られていたため、十分な意見交換の時間を確保できないことも想定された。そこで、あらかじめ発表用スライドを先方に送付し、要旨を理解していただき、短時間のスムーズな意見交換につなげた。また、留学生からのコメントや発表生徒からの質問に対する回答を後日送付してもらうことにより、オンラインでのコミュニケーションを補完した。

【今後の課題】

今回は課題研究に関して研究成果の途中経過を発表する機会を設けたが、今後はオンラインにより、課題研究を進める上でのアドバイスやアンケートに協力してもらう機会などを作れるとよい。コロナ禍以前の昨年度は千葉大学の留学生に来校していただき、課題研究についての意見をいただいたことで生徒の成長が見られた。このことから、今後も高大連携協定を締結している大学等と連携し、なるべく多くの国の留学生と意見交換することで、本校が目指す「多文化共生社会の構築を目指すグローバルリーダー」の育成を図りたい。

【経緯】

平成28年4月	SGH校の指定を受ける。オーストラリア・シンガポール・オランダ・ドイツ・イギリスへの海外研修開始（オランダ・オーストラリアについてはSGH指定以前から派遣）
令和2年3月～令和3年3月	新型コロナウイルス感染症の影響により、すべての海外研修が中止
令和2年8月	SGH運営指導協議員の先生の紹介により、海外研修代替企画として留学生に向けた発表会を計画



県内大学留学生との交流による取組み【新潟県教育委員会】

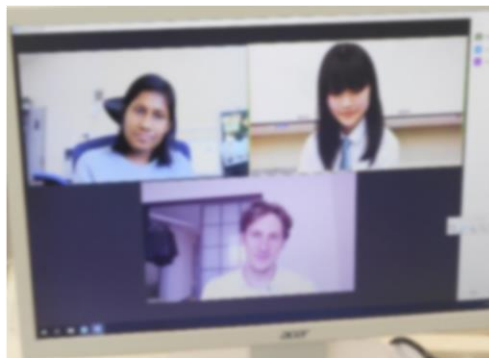
世界各地から県内の大学に留学している大学生や大学院生と県立高等学校、県立中等教育学校の生徒が英語を使って交流活動を行うことにより、日本や外国の文化や伝統などに対する理解を深め、世界に対する視野を広げるとともに、コミュニケーションツールとしての英語に対する学習意欲の向上を図る。

【プログラムの内容】

- 新潟県内3大学（新潟大学、長岡技術科学大学、上越教育大学）の留学生を県立高等学校、中等教育学校に派遣し、留学生と生徒による相互プレゼンテーション等を行う。

＜交流の例＞

- ・自国の文化の紹介と、質疑応答
- ・生徒の研究発表に対し、留学生からの質疑応答
- ・海外研修旅行の代替としての交流



【工夫した点】

- ・オンライン会議システムを利用した、相互交流を実施

【今後の課題】

- ・オンラインで参加を可能としたことで、参加希望の留学生が増えたため、事業の目的と留学生とのマッチングが必要
- ・ICT活用研修の実施



【経緯】

平成26年～	県内大学留学生ふれあい事業を実施
令和2年6月	県内3大学に県内大学ふれあい事業への留学生の派遣を依頼し、オンラインでの交流の派遣を承諾
同年7月	オンラインでの同事業の実施を決定
同年9月～	県内6校で、同事業を実施

オンライン・オフラインを活用したハイブリッド型の取組み【徳島県教育委員会】

県主催の英語学習・異文化体験プログラムである宿泊を伴う「徳島グローバルキャンプ」の実施が難しくなったため、その代替として、日本の大学に留学中の海外からの大学生を活用して、オンラインによるプログラム（英語によるアクティブ・ラーニング型ワークショップ）とオフラインによる異文化交流会を組み合わせ実施。県内の高校生39名が参加し、2020年（令和2年）12月に3日間（オンラインは1日あたり3時間程度）の日程で実施。

【プログラムの内容】

- ・3日間の英語によるアクティブ・ラーニング型プログラム
 - Explore the World：複数のグループリーダー（国内留学生）の出身国の文化や生活、国旗の意味などを学ぶ
 - Opinion Exchange：“What are the attractions and challenges of global society?”をテーマにグループ協議
 - Amazing Japan：徳島の魅力についてグループリーダーにプレゼンテーション
 - Flag making & Group presentation：“Design Our Ideal Future”をテーマに理想の世界を表す旗の作成と、その実現のためのアクション・プランをグループごとにプレゼンテーション
- ・異文化交流と阿波文化体験：地元大学に在籍している留学生をゲストに迎え、座談会形式で交流と阿波踊り体験。

※参加者アンケートによると、チャレンジ精神や外向き思考に関してキャンプ後には大きく数値が向上しており、「グループリーダーや留学生のように夢や情熱を持って何にでも挑戦したい」といった感想が寄せられた。

【工夫した点】

- ・ネットワーク環境担当者を常駐させてシステム管理
- ・パソコン＋スピーカーフォンを使った班活動とスクリーンを使った全体会
- ・県内の留学生も参加し、生徒が直接外国人と交流する機会を提供
- ・小グループで生徒が発言できる機会を確保



【今後の課題】

- ・オンラインならではの良さや特徴を活かしたプログラムの開発

【経緯】

令和元年 8月	「徳島グローバルキャンプ」（西部通学型5日間/南部宿泊型6泊7日）を実施。海外大学生を招聘し、小グループでのアクティブ・ラーニング型英語プログラムと地域文化体験学習、社会人との座談会等を行った。
令和2年 5月	新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、従来実施していた「徳島グローバルキャンプ」の実施方法について見直しを検討。オンラインを活用することとし、生徒募集は県内の感染状況を見ながら9月に行うこととした。
同年 12月	オンライン・オフラインのハイブリッド型「徳島グローバルキャンプ」実施